

永和市に到着して宿宮となった。足が気づかわれるが、それよりもまず手わけして馬の始末、炊事が先決である。最後の勇を振るって手ぎわよく終り、たき火をかこんで編上靴をぬぎ足の裏をみた。真っ白にふやけ、いく筋もひだのようにはれあがっている。破れなかったのが不思議に思われた。少しさわっただけでも飛び上がるほど痛い。食事よりも被服の着干しと同時に足の裏をかわかすのがいそがれた。

「ああ息が止まるほど痛かったなあと、我々はもう地獄に行っても針の山をのぼらされるようなことはないだろうな。もうのぼったから」

と一人が言ったので一同笑いしたが、難行苦行はまだ始まりなのだと思い返すと、笑ってなどいられないのだと思いつき、急に笑いが止みしゅんとなった。

たき火は赤々と燃え火の粉がおそってきた。また雨が大降りになったのか、軒を打つ雨音はげしく聞こえてきた。

浙贛作戦と内地部隊

千葉貞 新藤 榮 一

昭和十五年十二月一日、現役兵として近衛野砲兵連隊（東部第十二部隊）に入営し、約一週間野砲隊で不動の姿勢、敬礼、行進等の徒手訓練を受けた。のち、品川駅から軍用列車で神戸へ行き、国防婦人会の「暁に祈る」の大合唱に送られて、九千屯の輸送船に乗船して塘沽に上陸、北支天津の二九〇五部隊第二中隊に入隊した。

昭和十六年六月一日、甲種幹部候補生として新設された保定予備士官学校（旧軍官学校）へ第一期生として入隊した。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発し、区隊長以下学生が興奮の極であった。昭和十七年三月一日予備士官学校を卒業、見習士官として原隊の第六中隊へ復帰した。

昭和十七年五月十日、第三十二師団（楓）（済南）の歩兵一個連隊に山砲第二大隊（矢吹隊）が配属された。第

六中隊は加瀬大尉の指揮下に青柳少尉砲二門、新藤見習士官砲一門の小隊長として浙贛作戦で北支から中支抗州へ向けて出動した。目的は米機が本土空襲に利用した飛行場の破壊であった。

編成は一期の検閲未了の四月入隊の初年兵全員を入れた。いまだ一人前の兵隊にならない、体力も精神力も劣る初年兵を編成にいらしたので初年兵は全員戦死または戦病死でたおれたのである。また二、三年兵も冀東地区の討伐に長期間参加して天津に帰ってから一週間連続の外出を許可した。

ともかく五、六月の雨期に作戦したために一晚かかってかわかした軍衣袴が、翌朝行軍序列にはいるまでにビショぬれになった。馬は道路が分断されて稲苗を植えてあるので否応なく砲を分解して鞍上駄載にする。このため疲労も多く、くらみずを多発して傷口が化膿して悪臭があり、ウジ虫がわく始末であった。

また、雨期のため錢塘江が氾濫して食料の補給が絶え「現地自活せよ」の命令が出て見習士官が上番下番で徹夜の指揮官を命ぜられた。金を払いたくとも人っ子一人

おらず、またいても我々の持つ中国儲備券の新札では漢奸と疑われるので受け取らない。やむをえずただで貰ってくる始末であった。また、現地の中国人苦力クワリを沢山徴用したが、降雨で河が氾濫してまわりが湖となって孤立した部落に駐留した際、馬小屋に放火されてひどい目にあったこともある。

兵隊の軍靴も毎日泥水にはいるため足がふやけてぬげなくなる始末で、難行軍を重ねた。馬の軟地蹄鉄もへるが、早く落鉄が頻発して効果なしと判断した。とくに雨の夜行軍では前脚馬がはぐれて行方不明となり、無線により搜索しヤッと翌朝みつける始末であった。渡された地図は航空写真によるものできわめてそざつて不正確であり役に立たなかった。敵に遭遇したのは師団長、参謀等幹部が河の付近を行進中、対岸の山上から狙撃を受けたので、「砲兵前へ」で前進して山中に砲列を敷いて射撃を開始して制圧した。

そこで幹部を無事通したのち、砲列を撤去せんとすると再び敵兵の狙撃を受けてしまった。ようやく危地を脱すると敵兵の弾丸が小隊長の乗馬を狙いだし、反対側の

水田に音を立てて降りそそぎ、鞍に装着した鉄兜を射抜かれてしまつて驚いた。しかし指揮官が乗馬を降りることもならず平気を装っていた。漸く衛県城に到着して駐留となつたのである。

駐留中に私はアミーバ赤痢で下痢が止まらず、山砲も馬の故障続出で行軍できなくなつた。このため砲とともに舟便を利用して川をくだり杭州へ集結した。

昭和十七年八月一日、天津の原隊へ帰還後、瘦せ方がひどいため天津陸軍病院で診断を受け、即刻入院となつた。栄養失調症であつたので一か月二百ccを輸血奉仕隊により毎日続け、第一報(病重シ)、第二報(キトク)が出たがようやく一命をとりとめることが出来た。

昭和十七年十月一日 入院中少尉任官

昭和十八年二月一日 内地還送所沢陸軍病院に転院

昭和十八年四月一日 東部第一二部隊復帰、留守隊

の初年兵教育

近衛師団長・栗林忠道閣下が隷下の柏の部隊で乙幹が放火して連隊本部を焼き、暗号書を焼失して更迭され、

硫黄島の最高指揮官として赴任した。近衛野砲第一大隊

に甲府の六三連隊とともに硫黄島行の命令が出て、私は連絡将校として甲府の連隊長のもとへ派遣されたが、軍装検査が終わつて明日いよいよ出発しようとしたとき、突然命令が中止された。

昭和十八年十月一日、陸軍砲兵中尉となる。戦時中の内地の食糧事情はきわめて悪く、ほとんど高粱米であり、兵のスキ腹はひどく、付近の農家と馬糞と芋を交換して補給してやつたり、また実弾射撃で房州の飯岡へ出勤したとき、駅付近に干してあつた農家の肥料用の鱈の頭を食べたり、馬糧の満州大豆板の中心付近の柔らかいところを食べたり、非常に辛いものであつた。

昭和十八年十月十日 「範」部隊(近衛第三師団)中

隊附として九十九里海岸へ陣

地構築のため出勤

昭和十九年四月一日 習志野学校で十二センチ迫撃

砲の特別教育を受け、宇都宮

野砲兵連隊で、常磐兵団迫撃

砲大隊を編成、副官として真

岡へ赴任した。

ペリリュー島の戦訓として敵の上陸を阻止するには迫撃砲が一番効果的である。また砲兵工の仕事も簡単であるので野砲將校を特訓して迫撃砲大隊を編成した。編成に当っては三十歳以上の兵隊は原隊にもどし、二十歳代とこうたいさせたため、「突撃兵団」の称があった。

常磐兵団は敵が鹿島洋へ上陸の場合は第一線、九十九里と相模湾上陸の際は第二線と、戦闘序列が決まっていた。関東平野の中央で敵の爆撃に温存して出撃の際は利根川の盲杭を利用することになっていた。

昭和二十年八月十五日 那須野が原演習に出発直前ラ
ジオ放送で終戦の詔勅を聞く。

ただ最後まで残念だったことは、広島に原爆が投下されて迫撃砲弾を製造する兵器廠が焼失したため、実弾が最後まで入手出来なかったことである。

我々とはとにかく敵陣に突っ込んで死ぬ。「残った日本国民よどうか幸福に暮らして下さい」と念じつつ日々を送った。

昭和二十年九月三日、復員で自家へ帰る。帰路、常磐

線へ出て成田をまわって東京を避け、千葉の自宅へ帰着した。

行軍

愛媛県 正岡 建美

昭和十七年十二月現役兵として中国大陸に派遣され、昭和二十一年三月帰郷しました。

戦後四十五年以上たった今も忘れがたいものがあります。

揚子江をさかのぼり、武昌に上陸、湖北省及び湖南省等で苦戦をしたこともありましたが、今なお忘れることのできないこととして記憶に残っていますことは、昭和十九年の三月ごろ、原隊をあとに武昌にて師団勤務を命ぜられ、勤務をいたしましたが、約一か月たったころでしょうか、原隊に帰隊せよとのことでした。

そのころ原隊のいるところは、相当の奥地の前線とのことでした。少数部隊で四月上旬に帰隊することになり